

東京未来ビジョン懇談会（第2回）

平成29年4月21日（金）

—議事概要—

東京未来ビジョン懇談会（第2回）

平成29年 4月21日

【潮田次長】 それでは、第2回「東京未来ビジョン懇談会」を開会いたします。

本日の進行役を務めます、政策企画局次長の潮田でございます。よろしくお願いいたします。

初めに、会議の公開についてご説明いたします。

本日の会議の様子は、東京都のホームページ上でインターネット中継により配信をされております。

報道機関の皆様は、懇談会の冒頭から終了まで取材が可能です。

また、本日の会議資料、議事概要、中継映像につきましては、ホームページ上に公開いたします。

それでは、開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶をいただきます。知事、よろしくお願いいたします。

【小池知事】 皆さん、こんにちは。1回目を開きましてから、もう随分時間がたちましたが、私は今日もわくわくとしながら、今日のこのビジョン懇談会が開かれるのを楽しみにして参りました。

「東京未来ビジョン懇談会」、略しまして「ビジョ懇」。もう美男、美女がそろっておられてビジョ懇ということで、1回目のときにもお話ししましたように、是非、皆さんに私が期待するのは、むしろ当たり前でないこと、今は当たり前だけれども、将来はもう陳腐化、古臭くなっているかもしれない。むしろ、皆さんが、まだ20代、30代、それ以上、ちょっと上の人もいるけれども、あと30年後、50年後、自分はこんな東京に住んでみたい、東京がこうだったらいいなということ、皆さんから色々とアイデアを出していただきたいです。それを逆算した形で、例えば、2020年のオリンピック・パラリンピック、その準備だって、うーんと先のことを見越した上で、今、何をするかということを決めていきたい。そんなことで、皆さんからお知恵をしっかりと出していただいて、それを実現していくように頑張っていきたいと思います。

皆さんのテーブルの上には、色々な資料があるかと思います。（実行プランを手に取りながら）これ、寝る前に読んでください。良く眠れると思います。が、これ全部読むのは大

変だと思っけれども、ちっちゃな冊子がありますね。(ポケット版を手に取りながら) これはちょっとまとめたものですから、これをぱらぱらと読んでいただいて、ここ、もっと野心的というか挑戦的な数字にしてもいいんじゃない? とか、そういうことを皆さんで指摘していただければと思っています。

今もオリンピック・パラリンピックの話をしましたけれど、2020年って、もうあつと言う間なんですね。そこじゃなくて、さらに向こう、ビヨンドということで、是非見て、そこを目標に、皆さんで語り合っていきたいと思っています。

1回目のときは伊勢谷さんにお話しいただき、そして、高校生内閣にプレゼンテーションをしてもらいました。すごいですよね。高校生で内閣をつくっちゃってるんですからね。そして今回は、特に2回目ということで、生活、それから仕事という切り口から、東京の未来、それから東京の可能性について語っていただきたいと思います。辯護士の松澤香さん、よろしくお願いします。それから介護福祉漫談家のメイミさん、よろしくお願いします。そして、お笑いタレント、今や3児の母。

【くわばたりえ様】 はい。

【小池知事】 すごい。くわばたりえさん。

【くわばたりえ様】 はい。よろしくお願いいたします。

【小池知事】 3名の女性にプレゼンターをお願いをしております。

ということで、是非、このビジョ懇、みんなで楽しいビジョ懇にしていきたいと思っています。

それから、今日初めてご参加いただいているのが、くわばたさんであるとか、モハメド・オマル・アブディンさん。スーダン人だけど、日本語べらべらね。大丈夫よね。色々、自由にご発言いただきたいと思っています。

最後に、ちょっと自慢しちゃいます。今日の『TIME』誌、100人。世界を動かす100人に小池百合子知事、見事、選ばれました。

【高橋みなみ様】 おめでとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。パイオニアだって。

【伊勢谷友介様】 すばらしい。

【小池知事】 今回はパイオニアの枠で100人のうちに数えていただきました。ほかにリーダーとか、アーティストとか、色々なジャンルがあるみたいなんですけど、本当に頑張れとエールをもらったような気がいたします。

ということで、皆さんも世界を動かす、このビジョ懇になっていただきますよう、よろしく申し上げます。ありがとうございます。

【潮田次長】 知事、ありがとうございました。

続きまして、今回、懇談会に初めて参加される方々をご紹介します。お名前を読み上げましたら、ご着席のままで結構でございますので、一言、ご挨拶をいただきたく存じます。

初めに、ピアニスト、東京音楽大学専任講師、株式会社演代表取締役の菊地裕介様。

【菊地裕介様】 初めまして。ピアノを弾いております菊地と申します。

僕は東京で生まれまして、18歳のときにフランスに飛び出して、10年ちょっとヨーロッパにいた後、帰ってきました、それから10年近く、また東京で暮らしておりますけれども、僕自身もそうですけど、大学という場で教えてますので、日頃、10代から20代の若い人たちとも、色々お話をしていますので、本当に未来のことを考えていきたいと思っています。

今日はこのような場に参加させていただいて、本当にすばらしい皆さんと楽しみにしておりました。よろしく申し上げます。

【潮田次長】 よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

続きまして、お笑いタレントの、くわばたりえ様。

【くわばたりえ様】 クワバタオハラというコンビでお笑いをやっております、くわばたりえと申します。

今、6歳、3歳、1歳の3人の子供を育てているんですけども、大体、育児の、子育ての番組を約4年間、司会させていただいて、色々なママの悩みを聞いてきたりとか、あとブログもやっているんですけども、ブログの中にも、たくさんコメントで、ママの今悩んでいることというのを聞いてきたりとか、あと月に1回、メガネのママ友会といって、直接、子連れでママを呼んで、そこでみんなとお話しして、悩みを共有しているというので、大体、本当に子供が生まれてから、1万人以上の生の声を聞いてきて、そこで感じたこと、そして、こうせなあかんのちゃうかなということを、今回、プレゼンさせていただきたいんですけども。

ちょっと皆さん、分かるように、私の歯の裏側矯正、きれいになりたくて裏側から矯正しているので、ちょっと聞きにくいんですけども。

昔、高校の授業で理科の先生が、4時間目、3時間目の社会、黒板書いてて、その休み時間、日直が消すのを忘れてて、4時間目の理科の先生、その上から書いてはるんですね。

めっちゃ見えにくいねんけど、みんなもめっちゃ見えにくいから一生懸命書いたの、余計頭に入ってくるんですよ。ということで、聞き取りにくい、逆に頭、入ってくると思います。プラスに考えてください。今日はよろしくお願いいたします。

【潮田次長】 ありがとうございます。

最後に、学習院大学法学部政治学科特別客員教授、特定非営利活動法人スーダン障害者教育支援の会代表理事のモハメド・オマル・アブディン様。

【モハメド・オマル・アブディン様】 皆さん、こんにちは。名前も肩書も長ったらしい名前で申し訳ないですけども、アブディンと呼んでください。

スーダン出身者で、人生の3分の1を東京都で過ごしております。13年間ですけども。

自分の立場として、このビジョ懇でしたっけ。ビジョ懇で何ができるかなと思って、あんまり難しいこと考えずに、自分が東京で暮らして、もうちょっと、東京はもっとうすれば良くなるんじゃないかなとか思っていることはたくさんあります。

立場としては、外国出身者ということと、3人の子供、くわばたさんと一緒ですけども、6歳、4歳、3歳ですけども、一番下は保育園に入れてません。はい。そういうこともね。そういうことになって、自分の日本語のできない妻は、仕事できずに社会に飛び込めてない状況もありますけれども、こういった立場。

あるいはブラインドサッカーという障害者スポーツをやっていて、やっぱり障害者スポーツの環境というのは非常に劣悪で、トレーニングの練習もそうですけれども、劣悪で、練習する環境がほとんど整ってないですね。そういう立場からも、将来、私をもっと過ごしやすい東京を目指して、そうすれば、みんなにとってもいい東京になるんじゃないかなと思いますけれども。

以上、1分で、ここまでにしたいと思います。はい。

【潮田次長】 ありがとうございます。

本日の懇談会では、先ほど知事からお話がございましたように、まず松澤様、メイミ様、くわばた様にプレゼンテーションをしていただきます。その後、東京の未来や東京の可能性などについて、メンバーの皆様での意見交換を行いまして、おおむね18時頃の終了を予定しております。

それでは、ここからの進行は知事にお願いをいたします。よろしくお願いいたします。

【小池知事】 新しい仲間も加わりまして、2回目のビジョ懇を進めていきたいと思っております。

それでは、時間があるようでないので、早速進めていきたいと思いますが、今日は3名の方からプレゼンテーションいただきます。それぞれ約10分でお願いをしたいと思います。

辯護士の松澤香さんから始めたいと思いますので、早速、よろしくお願いいたします。

【松澤香様】 皆さん、こんにちは。今回は幸いなことに、ちょっと声がかかれていますけれども、出ます。お話しできます。良かったです。

辯護士の松澤香と申します。私は本日、「タラレバ0社会～生き方を自己決定できる社会の実現に向けて～」、このテーマでお話しさせていただきたいと思います。

まず、そもそも、おまえは誰なんだよということがあると思いますので、自己紹介させていただきます。

私は辯護士になってから、公的機関・民間企業のガバナンス改革に携わって参りました。要は、例えば、原発事故、企業の不祥事、そういうふうな問題が起こっているところに、「松澤、ちょっと行ってきてよ」と言われて、ハンズオンの形で出向したり、そんな形でお仕事をしています。

そんな私の経験を通じて、日本の社会における問題点を考えたときに、その一因として、『つまらないおじさん』問題というのがあるというふうに感じています。これ、全然、おじさんを批判しているわけではありません。

この『つまらないおじさん』問題というのは何かというと、同質的な集団による意思決定は、やはり間違ふということなんです。だからこそ、このビジョ懇は多様なメンバーが集まっているわけですが、意思決定における多様な視点が欠如すると、同じような年齢の、同じような考え方の、同じような背景の、同じようなマインドセットの方々が集まって意思決定がされる、そんな集団になってしまうと、やはり議論がきちんと活発に行われないんですね。空気を読む、忖度（そんたく）する、配慮する、何となく物事が決まってしまう、そんなふうに決まってしまうことが、日本の1つの問題点であるというふうに考えています。

そこで、データを見てみます。そうすると、日本において、いわゆるリーダー、指導的地位を占める女性の割合というのがどのくらいあるのか。例えば、都議会議員であるとか、あるいは国会議員であるとか、あるいは会社の取締役会、管理的な立場にいる女性というのは平均して10%程度しかいません。国際水準からして著しく低いということになってしまっています。

では、なぜ日本企業はおじさんだらけなのか、そういう組織はおじさんだらけなんでしょう。まさに今、話が出ておりましたけれども、出産によって、やはり女性が仕事を続けていくことが非常に難しいという問題点があると思います。

このデータをご覧くださいと、良く分かるんですけども、実際、働いている女性というのは、このデータによると現状7割ぐらいいます。ですので、随分増えています。しかし、そのうち約6割が、結局、出産によって仕事を辞めてしまっている、そういう現状があります。これ、よくよく見ると、この茶色の部分なんですけれども、昭和60年から平成元年よりも、実は今、17年から21年のデータなんですけど、今の方が仕事を辞めている割合は実は増えていると。なので、仕事に就いている女性は増えているのに、子供を産んで辞めてしまっている割合が増えているという問題が生じているわけです。

私は、先ほど話もありましたが、やはり女性が子育てや家族を大事にしていく、一生懸命やっていきたい、その気持ちはすごく大事だと思います。でも、他方で社会に貢献したい、働いていきたい、自分のキャリアを継続していきたい、それも当たり前の思いだと思うんですね。もし、そういう思いが実現できないのであったら、それはやっぱり未来の東京として正しくない、そういうふうに思っています。それを分かりやすく、出産したら働けない、保育園に入ればキャリアを継続できたのに、諦めないで済んだのに、そういう苦しい思い、葛藤、罪悪感、そういうものを私は女性のキャリアにおける“タラレバ”問題というふうに定義したいと思います。

そこで私は、このタラレバをなくす『タラレバ0社会』、社会や制度による制約をなくし、個人が自分の人生を自分で自己決定していける、そういう社会を目指したい、これが今日の私のテーマです。

じゃあ、『タラレバ0社会』の実現のために、どんなことが必要なんですか。色々書いてあるので、このスライドを説明させていただきます。

まず一番大事なのは、中央にある丸いところです。政治に女性の視点が反映される。これが一番大事なことで考えています。女性の視点が政治に反映される。これによって女性を支援する仕組みや制度が改革されていく。そうすると、働く女性の実態がどんどん変わって行って、働く女性も増えて行って、それによって人々が、「あ、女性も子供を産んでも働いていいんだ。それが当たり前なんだ」というふうに思って、人々の当たり前が変わっていく。もちろん、子供にとって近い所にそういうロールモデルがある、そんな社会になっていくと世論が変わっていきます。その変わった世論に基づいて、様々なニーズ

が出てくる。それをまた政治が反映する。そのためには、やはり女性の視点が必要です。したがって、やはり政治に女性の視点が反映される、すなわち政治に女性がいるということが極めて重要であるというふうに考えています。

そこで提案なんです、「政治の在り方に対する提案」として、現在、東京都議会の女性議員比率は20%となっています。これ、実は他の地方公共団体と比べれば随分高い数字なんです。ですが、私はこの数字を、2050年の東京は50%にしたい。なぜならば、社会は男性と女性から構成されているからです。ですから、当たり前のように男性と女性が50%、50%いる、そういう意思決定ができる都議会でありたいというふうに考えています。

また、ちなみに平均年齢もちょっと書いてみました。現状の都議会の平均年齢は53歳です。これもできれば38歳ぐらいにしたいなという思いを込めて、ちょっと書いてみました。やはり多様な視点を反映するという観点では、より将来に対して責任を担っていく若い世代が決めていくということが重要であるというふうに考えているからです。

ご参考ですけれども、では、世界の女性議員比率に比べて日本はどうかということなんです。実は193か国中、日本は164位です。偏差値41ぐらいですね。非常に低い。ちなみにアメリカは100位ぐらいにいます。この日本が164位にいるということを、やはり私たちは、これで本当にいいのだろうかというふうに思わなければいけないと、私はそう思います。

そして、女性議員比率を向上させることで、先ほど申し上げたような社会の半数を占める女性の公職への平等なアクセス権を保障するといった理念の実現であるとか、あるいは機能的な価値、すなわちファンクショナルな部分として、女性を含む社会のニーズを適正に反映していくということができると思います。調査によれば、性別によって政策の優先順位が変わるということが言われています。したがって、社会の構成員である女性のニーズを多様に反映することが極めて重要です。さらに地方議会、地方行政というものは、生活者の視点がより重視されるべきところです。なので、生活者としての女性の視点がより反映されるという機能的価値もあります。

さらに、今の都議会を見ていて、私は何となくちょっと、おじさんばかりでつまらないなというふうに思っているところもありまして、ここにたくさんの女性が入っていく、特に30%を超えて入っていくことによって、クリティカルマスという、量を超えて質的な大きなムーブメントを起こしていく数字の女性が入っていくことによって、男性中心的な風土、組織、文化を変えていって改革される、これによって「新しい東京」が実現してい

くというふうに考えています。そのためには、「ポジティブアクション」というような、「肯定的措置」というふうに訳されたりしますけれども、何らかのアクションが必要となります。

でも、実際、現状において、女性も別に普通に立候補することはできるわけですね。なので、何で必要なのかということがあります。やはり歴史的な経緯であるとか、ジェンダーバイアスであるとか、子育てとの両立の難しさによって、なかなか女性議員比率が高まっていかないという問題があります。女性のリーダーシップの難しさというのは、男並みに男勝りになっていくと女性らしくないと批判され、コミュニカルにコミュニケーションして、ソフトなリーダーシップを発揮すると、じゃあ、リーダーとしてどうなんだと言われてしまう。その前提に、やはりジェンダーバイアスがあるというふうに言われています。したがって、私はポジティブアクションが必要であるというふうに考えているんですが、ポジティブアクションの導入状況を参考情報として載せています。世界では既に100か国以上で何らかのポジティブアクションが導入されています。また、今国会でも、衆参両院と地方議会の選挙で男女の候補者の数ができる限り均等となることを目指すという法案が可決する見込みだと聞いております。

ポジティブアクションには、色々類型があるんですけども、時間の関係上、ここは飛ばしまして、ペア立候補制、私はこの話をしたいと思います。これはフランスの県議会における選挙の制度なんですけれども、男性と女性がペアで立候補します。このペアに対して投票する。自動的に男性と女性の受かった後の議員比率は50%、50%を達成できる制度なんです。ですから、例えば、エシカルエコノミーを提案された伊勢谷さんと高校生内閣の浜田さんが女性の未来とか子供の夢とかと、エシカルエコノミーを一緒に議論しながら、2人でペアを組んで立候補して、「ビジョ懇のメンバーだったし、いいじゃないか」と、みんながそのペアに対して投票していく、そんなことがイメージできます。新しい制度で非常に面白いと、是非、これを都議会でやってみたら面白いんじゃないかなというふうに考えています。

この観念の背後には、実は「パリテ」という考え方がフランスにありまして、先ほどの繰り返しになりますが、男性と女性が半々で構成されている社会の代表として、一緒に決めていこう、男性と女性が対等な対話をして決めていこう、そういう理念があるというふうに言われています。ですので、私はどちらかというとな女性のジェンダーイシューとして、女性に対して何かアクションしてあげなきゃというよりは、どちらかというとな、やはり公

平・平等の観点から、男性と女性が対話をして決めていく、そういう理念を大事にしていきたいと思っています。

2050年の東京は、『タラレバ0社会』の実現。社会・制度による制約をなくし、個人が自分の生き方を自己決定できる社会に日本の社会を東京から変えていく。

以上です。ありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございます。松澤さんの思いがたっぷりこもったプレゼンテーション、ありがとうございます。

そうなんです。フランスは男女ペアで立候補するということは、その段階で、おのずともう男女の比率がフィフティー・フィフティーになるということで、あとフランスはわざわざ女性の権利の確保ということのために憲法まで変えちゃっているということですから、その覚悟というのは全く違うというか、日本とは全然かけ離れているように思います。

また、これからフランスも大統領選挙が行われて注目をされるところですが、いずれにしましても、松澤さんの、この表の中にあるように、日本は世界の中で女性議員比率というのが164位、後ろから数えた方が早いというような状況であること、これはやはり政治も社会も、まだまだ日本というのは、ほかの国と比べると、かなり違うという、このことを認識していきたいと思います。

さて、それでは、今度は「笑って長生き！」ということで、メイミさんをお願いをいたします。プレゼンテーション、はい、よろしく願いいたします。

メイミさん、ちょっと頭の方で、1分間、改めて自己紹介もした上で、始めていただきたいと思います。合わせて11分で、よろしく願いいたします。

【メイミ様】 私、漫談家で介護福祉士でもあります、介護福祉漫談家のメイミと申します。どうぞよろしく願いします。私の方では、介護をテーマに、お話をしていきたいと思っております。

まずは今回のお話の内容なんですけれども、やはりどなたも、誰しものが年をとっていく。なので、何かしら関わるものですね。まずは介護業界について現状を知っていただくということ、そして、皆様のお知恵、ご協力をいただきながら、介護、福祉を盛り上げたい、このような内容のお話をしていこうかなと考えております。お時間の都合もありますので、資料の中から、特にお伝えしたいことを抜粋しながらお話ししたいと思います。

というわけで、自己紹介、まとめてみましたけれども、ここはすっ飛ばしたいと思いま

す。

続きまして、現在の活動状況、どんなことをやっているのかをお話しします。

漫談家としては、寄席など、様々な舞台上、笑いを通じて介護を知っていただくということをしております。そして、介護福祉士としては、現場に約8年半おりました。それから、現在は介護職者、そして介護職希望者、また家族の介護をしている方、高齢者などを対象に、介護のお話、講演をさせていただいております。

NPOの活動といたしましては、NPO法人笑顔工場という団体の代表を務めておりまして、高齢者施設、障害者施設などを訪れて、皆様に笑いをお届けしております。

どんなことをふだんやっているのか、今日はちょっとだけなんですけれども、おじいちゃん、おばあちゃんに評判のいい瞬間芸、1芸だけ披露させていただこうかなと思うんですけれども、よろしいでしょうか。瞬間芸です。一瞬、3秒で終わります。瞬間早着替えというのをさせていただきたいと思います。

新しい服に着替えるということで、新たな福、幸せが皆様にやってきますように、そんな願いを込めております。いつもはおじいちゃん、おばあちゃんが掛け声を、「脱げ、脱げ」って掛けてくださるんですけれども、このような場なので、ちょっと控えさせていただいて、拍手だけ、ご協力をお願いします。

では、いきたいと思います。皆さんの未来の福を願いまして、商売繁盛、家内安全、そして東京の未来を願って、いきます。

3、2、1、はい。

ありがとうございます。以上です。

それでは、本題に移りたいと思います。多分、この後のお話が説得力がなくなりそうですので、上着だけは着たいと思いますが、ちょっとお手伝いいただきまして、先に進めます。

まずは、未来の自分について想像してみました。仮に自分が要介護状態になっているということを想定しまして、介護ロボットなどの機器の発展、それによって自立をすること、それから高齢者に生きがいを与える要素でもあります役割、仕事。高齢になると、その機会がだんだんと減少します。自分のペースで、介護状態になっても、好きな仕事を少しずつ続けていけるような社会だといいなということを考えました。そして、高齢社会の課題でもあります認知症、老々介護。仮に夫が認知症になったという想定で考えてみました。社会全体で認知症に対する理解が広まっていて、さらには家庭の中で介護を続けら

れるような十分なサービスがある、そうなっているといいなということを考えました。

続いて、ちょっと飛ばしまして、2050年、社会のイメージです。ロボットなんかの技術向上という期待もありますけれども、私が最も願うことは人の意識の向上です。介護士の一定レベルでの質の向上、そして子供たちが憧れるような職業であること、さらには世界にも誇れる日本、東京の介護福祉であること。身体的な介護というのはロボットなど機器でも行えると思うんですけれども、精神面のケアというのは、なかなか人でないと難しい面もあるかなと思います。技術の向上によって負担が軽減することで、より心に、精神面にケアが行き届いた介護ができるようになるといいかなということを考えました。そして、社会全体が障害や認知症、介護について、当たり前を受け入れて、当たり前にお互いが助け合えるような、そんな社会になっているといいなということを考えました。

では次に、現状のお話をしたいと思います。

現場目線で、まず介護のお仕事について、少しお話をしたいと思います。

トイレ、お風呂などなど、生活のお世話、これは介護のほんの一部なんです。介護って何なのかと言うと、その方が日々をどう過ごしたいのか、どうありたいか、人生をどう生き切りたいのか、その思いに寄り添って関わっていく、これが介護の本質です。その上で、介護にとってコミュニケーションというのは非常に大切なんです。共同作業なので、うまくいかないと介護もスムーズにいきませんし、高齢者と言いましても、個性も様々ですので、また80年、90年生きていらっしゃった皆様、その方々に合わせたコミュニケーションで、その思いを受け取っていくということが必要になってきます。

ですが、実際、現状ではなかなか難しい、思うようにいかないケースというのがあります。人手が不足して、一人一人にちゃんと関わるができない、必要最低限の身体介護、こちらの都合で動いてしまう。自力でできることも介護士が全部やってしまう。そうしますと自立する機会を失って、身体的機能が低下して、意欲も低下して、さらには介護士が働くモチベーションが下がってしまう、そのような状況。そして、時間がなかなかないので、コミュニケーションのスキルを磨く時間もないというような状況が、現在起き得るようなこともあります。

では、業界全体を見てみたいと思います。今後、高齢者比率高まりまして、2025年、高齢者の5人に1人が認知症です。という、ビジョ懇のメンバーのうち3人か4人ぐらいは認知症になるということですね。そして、介護士数ですけれども、高齢者の増加率に追いついていかないということで、2025年は介護士3万6,000人が不足するという見込みが出

ております。3万6,000人ってどれくらいかというと、私の実家は福岡なんですけれども、福岡のヤフードーム、あれが大体一杯になって、若干空席が出るぐらいの人数です。ちょっと分かりづらくてすみません。

一般的に介護士、過酷な労働、そして低賃金といったイメージがありますけれども。離職率、なかなか下がらないんですが、離職の理由として、実は法人、そして施設に対する運営、あり方への不満、それから人間関係、こういったことを理由に退職をするというケースが非常に多いということがデータから読み取れます。仕事柄ストレスも多く、虐待件数が飛躍的に増大しているという状況もあります。ここら辺は詳しいデータ、参考資料をお付けしましたので、よろしければ、後ほどご覧ください。

では、ここまでのお話を踏まえて、今後どのような取組をしたら、2050年の、先ほどのイメージに近づけるかというのを考えてみました。是非、今日は皆様のお知恵、発想をお借りして、これだったら、うちの業界と一緒にコラボできるかもとか、こんなアイデアどうですかなんていうことも、後でお話しできたらいいなと思っています。

介護士のイメージアップ、これなんですけれども、やっぱり良い面も正しく伝えていきたいなというふうに思っております。言葉自体が持つイメージ、介護とか、ケアするとか、ヘルプとかって、どこことなく助けてあげるといようなイメージがあると思うんですけれども、言葉をちょっと新しく変えてみるというのも1つの提案かなと思いました。私が考えたのは、「アシストする」という言い方なんか、ちょっと格好良くていいななんて思ったんですけれども、皆様も何か思いついたことありましたら、よろしくお願いします。

そして、介護のコンテスト、業界の中だけで行うのではなくて、一般の方も参加できる企画があるといいかなと思いました。長年介護をされているようなご家族を介護している方もいらっしゃるのです、そういう方が参加したりだとか、あとは高齢者と介護士がペアで出るようなコンテストなんかもあったらいいんじゃないかな。そうするとイメージアップ、そして関心を持っていただける機会になるのかなということを思いました。

介護士の中学、高校への出張授業といった取組も行われているようなんですけれども、こちらもやはり介護士だけではなく、高齢者も一緒に出向いて、実際に交流をしていただく機会もあれば、さらに高齢者、介護に対する理解が深まるのではないかなと思って提案をいたしました。

次に、こんな提案もしましたが、ここは飛ばしまして、次に、介護士の質の向上を図る上で後回しにされがちなのがコミュニケーションのスキルなんですね。技術はやっている

うちにだんだん身についていくんですけども、コミュニケーションのスキルが身につかないままにきているという方も少なくはありません。この課題に対する取組ができるのかなと思いました。

私が考えましたのは、モデルとなるような介護士、カリスマ介護士チームが各施設を回って指導をするというようなことも提案させていただきました。

そして最後のところですね。共生社会、障害や認知症などに対して特別視せずに、お互いに困ったときは自然に助け合える社会になっていることが理想だなと考えました。誰もが持っている優しさを出せるきっかけがあるといいと思うんですね。そんなわけで、ちょっと「やさしさ通帳」というのを書いてみたんですけども、自分が行ったボランティアに対してポイントがついて、今度、自分が困ったときに逆に支援してもらおうというようなことができれば面白いかなというふうに思いました。

認知症の方によるカフェ運営。もしかしたらカフェなので、品物がなかなか出てこないとか、何か色々と問題があるかもしれませんが、やはり当事者と交流する機会があるということが大切だと思います。

ダイアログインザダークという暗闇を体験するプログラムがあるんですけども、以前そこに参加しまして、視覚障害者の方がアテンドで案内してくださって、色々な体験をするんですね。そのときに、視覚障害者の方が頼もしいなと感じたりだとか、暗闇の中で感覚が鋭くなったりだとか、そういうのって体験して初めて気づきます。

そして、聴覚障害者の方と、先日、映画を撮影したんですけども、音がない、手話と字幕だけの映画なんですね。あの方たち、映画館で洋画は見れても邦画は見れないんです。字幕がないから。そういうことも初めて交流をして気づくということを感じております。

では最後に、これまで私が活動の中で心に残っているエピソードを1つお話しさせていただきます。

NPOの活動で、ある施設を訪れたんですけども、そこで催しをやりまして、後日のお話なんですね。施設の方が、そのとき写真を撮ってらっしゃって、見せてくださったんです。皆さん、笑顔で写っていて、それを見ていたときに職員の方が女性の方を指さして、「この方ね、この催しの2週間後にお亡くなりになったんです」とおっしゃったんですね。その後、言ったんです、こういうこと。「この人生の最後の最後に、こんな笑顔になれる時間をつくれて良かったです」と、これは介護に携わる者みんなが持っている思いじゃないかなと思っております。

また、高齢者の方々から様々なことを学びます。100歳のおばあちゃんとの、こんなエピソード、これを最後にしたいと思います。

101歳の誕生日迎える数日前、「ああ、すごいですね、101歳」と言いましたら、その方が、「いやあ、気づかなかったね」っておっしゃったんですね。「気づかなかったんですか」と笑って答えましたら、その後、言ったんです。「いや、気づかなかったね。夢中で生きてきたからね」と、とっても素敵な笑顔で。そのときに「ああ、こんなおばあちゃんになりたいな」と、100歳の笑顔に未来に希望を感じたんですね。やはりお年寄りの笑顔は若い世代に希望を感じさせると思います。是非、皆さんも介護のことってなかなか話す機会がないと思うんですけども、ご自身の将来について考えるきっかけになればいいなと思い、ここでお話をさせていただきました。

それでは、高齢社会、明るく笑って長生きできる東京を夢見て、この場はこれで締めとさせていただきます。

ご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。

【小池知事】 メイミさん、ありがとうございました。歌舞伎に負けないぐらいの早変わり、ありがとうございました。

介護の現場、色々苦しいことも大変なことも多いかと思えますけれども、またメイミさんがいると、明るい場所、そういう介護の現場になりそうで、それだけでも希望ですね。ありがとうございました。

さて、3人目のプレゼンターは、今日は、くわばたりえさんをお願いをしたいと思います。1万人のお母さんの代弁者として、是非、お話しいただければと思います。よろしく願いいたします。

【くわばたりえ様】 よろしく願いいたします。

先ほどメイミさんが3秒で服を脱いだので、私も1秒でパンツ見せれるなと思ったんですけども、それをやっちゃうと、第3回目から呼ばれないなと思ったので、それはやめたいなと思います。よろしく願いいたします。

時間が10分しかありません。もう9分40秒になりますね、こんな話している間に。

私、先ほどモニターにもありましたけれども、育児しやすい東京・日本にしたい。サブタイトル「ほんまにせなあかんで、やばいで、知らんで、あんたら」ということなんです。私、メガネのママ友会というのを、約6年間、毎月やっているんですけども、そこでたくさんのお母さんたちと直接話しています。こんなことが育児大変やというのをたくさん

耳にしているんですけども、何で私その会をしようかと思ったかという、私自身が1人目出産した後、頭おかしくなりそうだったんです。育児が大変過ぎて。毎日泣いてたんですね。もう子供の泣き声、抱っこしても泣きやまないから、トイレに閉じこもって、耳塞いで泣いたことも何回もあって、「これ、私だけなんや。みんな笑顔で育児してるのに、私だけがこんなつらいのかな」ということをブログに書いたら、私も、私も、私も、とんでもない量がたくさん来た。じゃあ、ちょっとでも育児楽しくなるように何かないかなと思って始めたのがメガネのママ友会なんですけれども、その中で、たくさんママと一杯お話しして一番感じたことが、孤独な育児をしている人が非常に多い。「孤独な育児」、1人で育児している人が本当に多いんですね。

「孤独な育児」してる原因として何かというと、まず、パパの仕事が忙し過ぎる。私の旦那様、朝6時に家を出て、夜10時、11時に帰ってくるんですよ。子供の顔なんか寝顔しか見ていない。これ、私だけかなと思ったら、こういうパパってたくさんいるんですよ。ほんでもう、月に2回ぐらいしか休みがない。ほかのママですよ。月に2回しか休みがない。じゃあ、たまの休み、旦那さん、寝ますよね。その寝てるときに、奥さん、「ちょっと起きて、赤ちゃん抱っこして」言えないですよ。何で言えないか。旦那は仕事して稼いでいる。私は今、育休中、もしくは専業主婦。私はお金を稼いでない。私はしんどいって言っちゃいけない。こういうふうにママがつらくなっているというのを感じます。

あとですね2番目、両親、あと旦那さんの両親が、すごい遠い所にいるので頼れない。頼る人がいないんですよ。そして、今、高齢出産、非常に増えてますよね。高齢出産があるということは、その高齢で産んだ、そのおじいちゃん、おばあちゃんもほんまに高齢なんですね。頼りたいなと思っても、腰痛い、膝痛い、耳遠い、頼れないんですよ。もう今、高齢出産が増えたら、そうになってきちゃう。遠いから、特に東京は多いと思います。みんな地方から出てきて、東京で仕事して、東京で知り合って結婚してというのが多いから、本当に東京はすごく、頼る場所がない、頼れる人がすごくいないなと思ってます。

あと、これ3つ目。これ実は「孤独な育児」の中で一番重要視していただきたいんですけども、育児の大変さを分かってもらえない。私、これね、これが一番「孤独な育児」をどんどんしていった理由やなと思うんですよ。

「孤独な育児」をなくすためにはどうしたらいいかなって考えたんですよ。「孤独な育児」をなくすために、「孤独な育児」がなくなれば、育児しやすい日本になると思うんです。じゃあ、「孤独な育児」をなくすためにどうしたらいいか。私、色々な施設をつくったらい

かな、こんながあればいいかなと思ったんですけど、一番、むっちゃ考えたときに、1人でも多くの人に育児って大変なんだって分かってもらうこと、それがほんまに大切なんじゃないかなと思って。

じゃあ、そこでどうしたらいいかとなったときに、私は正直、もうちょっと年輩のおっちゃん、おばちゃんに「育児って大変なんですよ」って言ったって、「あたしらやってきてん」って終わっちゃうんですよ。だから、やっぱり中学、高校、これからパパ、ママになる人の前で育児の授業をしてほしいなと思います。

例えば、私が中学のときやったら、卵子と精子がみたいなの、そういう、赤ちゃんって、どうやってできんのぐらいの話で終わってたんですけども、赤ちゃんができたなら、こんなふうになっていくっていう授業をしたい。じゃあ、その授業を誰がするのか。現役のママがしてほしいんですね。現役のママが、初めて子供を授かったときに、こんなにうれしい気持ちになりました。でも、こんな不安もあったんです。産んだとき、めっちゃ痛かったで、死ぬほど痛かったでという話があってもいい。その後、産んだ後、こんなかわいいはずの赤ちゃんが、何で私、産んだんやって思う瞬間もあったんですよ。でも、やっぱりめっちゃかわいくて、旦那さんに、こんなことしてもらってうれしかった、旦那さんのこの一言で傷ついた、生の声を未来のパパ、ママたちの前でお話しする。これで何ができるかというと、中学生、高校生が、「え。私、将来、子供生まれたとき、もし困ったら、どんなふうに、誰に助けを求めたらいいのかな、どんなふうに頼ったらいいのかな。頼った方がええやんな」って考えたりする時間がある。男の子たちが、将来、僕がパパになったときに、奥さん、こんな大変があるんや。じゃあ、僕、こんなことしてあげたら楽になるんちゃうか。もう、中学生、高校生の育児なんか全然関係ないときから、そういうことを学ぶ時間があってもいいんじゃないかな。私があまりにも知らな過ぎたんです。子供かわいいだけで子供産んで、産んでみたら、1日中泣いてる、夜中全然寝ない。本当にね、2時間置きに授乳するんですよ。何でかって、赤ちゃんって胃がちっちゃいから。私、ほんまに朝、昼、晩、3時のおやつ、これくらいでおっぱいあげといたらええんかなと思ってたんです。もうとんでもない。2時間置き。2時間置きっていうことは、夜中もずっと起こされて、おっぱいあげる、ミルクあげるってするんですね。で、ふらふらになる、寝不足、旦那にいらいらする、けんかになるみたいなの、本当に悪循環なので、そういうことを知っていただいたときに、じゃあ、僕、こんなサポートしようというのを、中学、高校で考える時間が持てたらなと思います。

これで、ママが授業することによって、何がいかというのが1つあって、今、先ほどもお話ありましたが、バリバリ働いていた人が専業主婦になるって多いですね。バリバリ働いていた人が専業主婦になったときにどうなるかという、今まで、すごい給料とか、上司の方に褒められて、色々なことで、「頑張ってるね、頑張ってるね」があったのに、育児って頑張ってる前になっちゃって、私、何のために今生きているんだろう。何か、何か、別にお給料も何ももらえなくなっちゃってる。私って何。何のために今生きてるのっていうのがすごい多いんですよ。じゃあ、こういう子供たちの前で授業することによって、未来のパパ、ママのために、私、何か一杯しゃべった、私、何か、未来のために力になれた、こういうことで現役のママもすごくプラスになるんじゃないかなと思っております。

そうですね、「孤独な育児」が一番というふうにお話しさせていただいたんですけども、「孤独な育児」をなくすために一番大切なこと、これ、パパの育児休暇、絶対とってほしいなと思うんですよ。パパの育児休暇、何か変な、いましたね、議員さん。あの人のおかげでむちゃくちゃになってしまった。何やってんだって言いたいんですけどもね。

私、パパの育児休暇の話したら、私、要らないって言うママもいるんです。何でかっていったら、育児休暇とっちゃったら、パパ給料もらえない。ちょっと育児助かるけど、お金なかったら生活できひんやん。それやったら、私も育児大変なん我慢する。旦那さんに働いてもらっていい。こんなママもたくさんいるんです。でも、それやったら、また「孤独な育児」の始まりなんですね。

じゃあ、どうしたらいかなって、私、考えたときに、時短育休。旦那さんが朝1時間遅く家を出て、夜1時間、2時間早く帰ってくる。このことによって育児をする時間を増やしたいなと思って。

育児する時間が増えると、えっ、子供ってかわいいだけやと思ったけど、こんなに泣くん、こんな大変なん、おまえ、よう1人でやとったなと、こんな会話ができるんですよ。やっぱね、夫婦の会話を持つ時間って、すごく大切やと思うんです。この時短育休で夫婦のコミュニケーションとる、1人で育児大変やな、2人でも育児大変やな。2人で育児大変やけど楽しいな。俺たち幸せやな。こうなってほしいなと思うんです。俺たち幸せやな。おまえのこと好きやで。私も好きよ。こんな会話がある。第2子が生まれます。少子化がなくなりますよ、皆さん。時短育休で少子化がなくなるかもしれない、ここまで行っちゃうんですね。

で、私、イクメンがやっぱり増えると思うんですよ。こういうふうに時短育休になると。イクメンが増えるとどうなるか。イクメン、イクメン、イクメンだらけになったら、イクメンなんていう言葉がなくなります。イクメンという言葉なんかなくしたい。育児する旦那さん、パパ、そんなん当たり前のことやん。私、育児してますよ。何か特別な言葉はないですよ。ただの母親、ママ、イクウーマン、言われたことない、そんな言葉ない。なぜなら育児するのが当たり前だから。育児するのが当たり前になったら、イクメンなんていう言葉もなくなるなと思って、そういうふうになってほしいなと思います。

そしてごめんなさい、時間がほとんどないんですけども、一番最後に、これ、大反対する方、多々いると思いますが、全ての子供が保育園を利用できるようにしたい。待機児童ゼロ、全然できてへんのに、たわけ、おまえはアホかなんて方もいらっしゃると思うんですけども、育児、本当に専業主婦の方、働いてなくても預けてもええやんと思うんですよ。頼る人いてないんだもん。近くにおじいちゃん、おばあちゃん。昔はおじいちゃん、おばあちゃんも一緒にいたのに、今いないんですよ。だからあってもいいと思うんですね。それで、そういう国ってあるんですよ。全ての子供を、保育園じゃないけど、預けたりするという国が。そういう国に友達が旦那さんの転勤で行ったんですけども、その友達が相談があるって。そこでは働いてないママでも子供を預けていいんだけど、「私、預けていいのかな、働いてないのに、私、育児放棄じゃないかな。私、母親失格じゃないかな」、「ええやん、全然失格ちゃう。そんな制度があるなら使ったらいいやん」、「そう？ ありがとう」って言ったんです。私、これで何が言いたいか。言っていていいですか。日本の人たちが、育児はママがせなあかんというふうに、もう固まり過ぎ。ママ自身が、私が育児しなくっちゃ、人に頼っちゃいけないんだ、私がするんだ、するんだと固まり過ぎて、「孤独な育児」になっていっちゃってるんですよ。だから、それを預けることが当たり前。だから預けて昼寝したってええやん、もう。ぱぱっと、もう、家のことしたっていいやん。何だったら週に1回、映画、教室、行ってもええやんみたいな、ママになっても自由なことがあってもいいんじゃないかなと思います。

だから、ママが育児するのは本当に当たり前です。自分の産んだ子供ですから。ママが育児するのは当たり前やけど、ママが1人で育児するのを当たり前にしたら絶対にしたらあかんと思うんですね。だから、10年後、20年後、私が今言ったような内容がほんまになってほしいな。地域で近所でみんなで育児する日本になってほしいな。ほしいじゃなくて、これを実現できるように、皆さん、お力をお貸しください。

以上、くわばたりえでした。

【小池知事】 ありがとうございます。くわばたさんのお家は、きっと、いつも子供さんの声も含めて、特にあなたの声が大きそうやから。

【くわばたりえ様】 そのとおり。

【小池知事】 にぎやかで。

【くわばたりえ様】 占い師なんですか。そのとおりでございます。

【小池知事】 ありがとうございます。

【くわばたりえ様】 ありがとうございます。

【小池知事】 3人の皆さんに、それぞれの観点から、今日はプレゼンテーションしていただきました。

それじゃあ、質疑応答というか意見交換をしたいと思います。3人の方々のテーマでもいいですし、このビジョ懇の狙いは、30年、50年後の東京、どうあるべきかということ。今日は特に生活という面の切り口で話をしていますので、是非、皆さん、今の3人の方々から幾つか気づかれた点、私はこうするというような点、是非挙手をしていただいて、お名前を述べていただいて、ご意見を伺えればと思います。

じゃあ、伊勢谷さんから。はい。

【伊勢谷友介様】 皆さんのでいいですよ。はい。

皆さん、お三方、プレゼンありがとうございます。本当に今の生きる人たちが置かれている社会状況というのを、三者の視点で描いていただけたのかなと思って、僕が、実はそれぞれに別の問題でありながら、実は今、社会が変革していく最中のプロセスとして生まれてくるネガティビティというか、つらい部分といいますか、老人が増えてくるのも社会構造変わってくることで、おそらく、くわばたさんがおっしゃった子育てが、核家族化が進んでしまったことで、親御さんがヘルプできない環境をつくっているという、今の社会がつくっていることだと思いますし、松澤さんがおっしゃった、女性が生き方を自由に選択できるような社会ということというのは、受け手である社会自体が、女性が選択できる自由を与えられていないという状況もあって、今の現状のつらい部分が皆さんから出てきたなと思いました。なので、僕が思ったのは、それぞれの問題には、実はその介護だったら介護だけに問題があるとか、子育てそのものに問題があるとかということではなく、社会の環境（そのものが問題）なのではないかなというのが、非常に思うところです。

松澤さんのことに関しては特になんですけど、僕、先日、LGBTの会議に出たんですけども、そのときにも感じたんですけども、おっしゃっていたことの一番の問題は、無関心な人っておっしゃったんです。ただ、無関心な人って、じゃあ、誰なんだろうなと思ったときに、意外とさっき松澤さんのおっしゃった、面白くないおじさんでしたか、そういうカテゴリーに入っている人たちなんですね。というのは、どういうことかということ、おじさんの世界で進んでくると、そのほかの世界というものがあるというふうに、あんまり考えないんですよ。だから、痛みがそこにあることも認識しない、想像しないんですよ。だから、結局、どうやって助けていいかわからないということは、その人たちは、すごくその問題を分かっているんだけど、興味持てるという状況じゃない。だから無意識なんです、実は。だから、これが今の社会変革の中での問題だというのが僕が思うところです。

なので、もちろん認識として、みんなが女性が頑張って働けるということもそうです。多分、働ける環境に社会をしていくという具体的なアクションプランが、もしかしたら僕らだったら一緒にできるのかなというふうに思いました。

なので、同じく、くわばたさんの核家族化が多分子育ての問題だとするとするならば、僕、これ、そうだな。今生きてる人、みんな、人生、ダブルブッキング中みたいな感じだと、僕、思うんですよ。旦那にならなきゃいけないし、親にならなきゃいけないし、働きもしなきゃいけないしという全部が、皆さんの人生に絡んできて、世の中が変化して、おそらく、もしかしたらAIによって働かなくていい人材が増えるかもしれない。そのときは、もしかしたら救えるかもしれないんですけど、その過渡期としてのデザインみたいなものは、もちろん問題だけじゃなくて、その周り、社会の状況として、何か1つずつ、優しい手の添え方みたいなのができたらなど。

ちょっと話長くなってすみません。だから、くわばたさんのプレゼンで言いたいのは、もしかしたら、今、つくられた親同士がちゃんとつながって、もしかしたら子供を保護し合うことで、保育所を新しくつくって、新しい仕事を増やすよりも、もしかしたらカバーし合える、コミュニティをつくることの変化のきっかけになってきたりするんじゃないのかなというふうにも感じました。

少し長くなりましたが、以上です。ありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございます。

アブディンさん。

【モハメド・オマル・アブディン様】 お三方、ありがとうございます。

見えなくて、残念ながら、メイミさんの、どこまで脱いだか分からなくて、自分の「盲想」で、ちょっと行くところまで行きましたので、はい。

松澤さんの女性の政治参加については、私は基本的に同感ですけども、ただ、ちょっと私は危惧するところがあります。というのは、皆さん、結構、都議会、あるいは国会レベルで女性議員が増えればいいという考え方はあるんですけども、私はそれでは問題は根本的に解決できるとは思えないんですね。なぜかという、例えば、2000年代前半に、某首相が非常に人気が出て、いわゆる誰々チルドレン、チルドレンで、女性が一杯増えましたけれども、それで党に公認された女性は、必ずしも女性のために訴えていくとは限らないと思うんですね。

例えば、例が悪いんですけども、アフリカのルワンダという小さな国があります。その国会議員の女性の比率は60%なんですね。だけど、これでは、じゃあ、女性の権利がどんどんどんどん、女性が活躍しやすい社会がつくられているかという、そうでもない。私が考えるのは、国会のつまらないおじいさんたちが女性の機嫌伺いしなきゃいけないような状況をつくっていかなくちゃいけないですね。要は、草の根のレベルで、女性が政治組織をつくって、女性、下から、政策提言していく。それに対して、国会のつまらないおじいさんたちは、この人たちの施策を酌み取っていかないと、自分も当選できないんだと、そういった状況を、プレッシャーをつくっていかないと、おじいさんたちは、子育てと関係ないし、別にそんなに投票所にも行かない女性のために、わざわざ何かすることはないと。要は、政治家に、あまり夢を期待するのはやめた方がいいと思いますね。草の根のレベルでの圧力団体を、やっぱり女性はつくっていくべきだと私は思うんですね。

もう一つは、子育ての保育の問題、自分も子供は待機児童なんですけれども、僕は、個人的な話で申し訳ないんですけども、5人兄弟なんですけど、うちの母親は銀行で働いていました。5人の子供、どんどんどんどん図々しく産みながら、全く仕事を辞めずに、3カ月で私たちは保育園に入れられました。なぜかという、その銀行には、保育所があったんですね。要は、例えば日本の通勤時間を1時間半とすれば、仕事に頑張って復帰したとしても、保育園に預けたとしても、もう仕事に到着した瞬間に、「子供が熱を出しました。帰ってきてください。」それはもう仕事できないですね。だから、近くであれば、例えば、授乳だって、昼休み時間とか、あるいは2時間ごとにちょっと出て、授乳して帰ってくると、そういった職場に近い所で保育園をつくっていく考え方が、やっぱり大事なかなと思

ます。田町辺り、どんどんどん保育所ができていけばいいかなとは思うんですね。なので、今のやり方だと、自治体の中で、在住区域で保育園をつくっていくやり方は、あんまり実情に合っていないかなと私は思います。

以上です。

【小池知事】 ありがとうございます。スーダンから来た方だとは。ねえ。日本語のうまいこと。

アブディンさん、字というよりは音で覚えたの？

【モハメド・オマル・アブディン様】 そうですね。はい。音で。あとは点字とか、そういうの。

【小池知事】 点字で。

【モハメド・オマル・アブディン様】 はい、そうですね。だから、漢字、結構、日本は同音異義語って多いので、やっぱり結構、これでだじゃれ、どうしてもね。だじゃれをつくってしまうんですね。やっぱり音だけで聞いていると、どうしても、何かこう思い浮かぶんですね。だから、外国人には、結構つまらないだじゃれを言う人が多いのは、やっぱり漢字をあんまり考えないで、同じ言葉を考える。多分、パッケンさんもそうなんじゃないか。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 僕もいつも我慢してるんです。思い浮かんで我慢してるんです。

【モハメド・オマル・アブディン様】 そうですか。

【小池知事】 いや、でも、デーブは全然我慢してないよね。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 デーブはちょっと。抑制心がありません。

【モハメド・オマル・アブディン様】 そうですね。

【小池知事】 すばらしい。アブディンさん、待機児童、どこで。お家どこですか。

【モハメド・オマル・アブディン様】 今、引っ越したんですが、前は三鷹だったんですね。三鷹は全国で25番目に多いらしいから、それを知らなくて。

【小池知事】 詳しい。すごいよね。うん。

さあ、それでは、また皆さんからご意見伺いしましょうか。

落合さん、いこうか。

【落合陽一様】 はい。落合です。

僕、3人の意見って全部似てるなと思って。

僕、最近、自分に子供が生まれたんですけど、子供をずっと見てると、世の中というのは大分近代だになって、ずっと思うんですね。僕の研究室とかライフテーマって、どうやって脱近代するかということなんですけど、我々の社会って、例えば、明治以前までは「愛」という言葉がなかったわけですね。「愛」という言葉は、「LOVE」を輸入しようとして発明した言葉の1つで、もとは仏教用語です。例えば、「大衆」という言葉って大正時代までなくて、大衆という言葉ももとは仏教用語で、統制のとれた僧の集まりという意味です。それが統制がとれなくなったのは大正時代以降の話です。

それを考えたときに、前回、小池都知事が100年以上前の新聞記事を持っていらして、100年後こうなるというのが書いてあったんですけど、あの中で僕が一番印象的だったのは、100年後、幼稚園はなくなると書いてあったことです。

それはどういう意味かということ、100年後、日本に保育園が要らない理由は、女性が全員高等教育を受けるので、家で子供に教育を施す程度の学が全員につくという意味です。これは女性の社会進出を否定している考え方です。しかし、100年前ではそれは常識で、でも、我々の100年後はそうじゃない常識がやってくるんだらうと僕は思います。

その上で、僕は不思議だなと思ったのは、なぜ男女の比率が50%、50%じゃないといけないのかということの方が僕は違和感があって、つまり80対20で女、男の場所があってもいいし、逆に50対50にすべき場所もあっていいし、逆に言うと7対3で男が多い場所もあっていいはずなんです。だから、必ずしも5割、5割にしないといけないという考え方の方が多様性が低いと僕は思っています。

あともう一個が、ママになったから今までの生活を継続できないというあり方って、僕は意外と当たり前のことだと思っていて。それはどういう意味かということ、大学生になったら高校生のことはしなくなるし、もしくは大学院生になったら大学生のことはしなくなるし、もしくは社会人になったら学生のことはあまりしなくなる。だけど、それでキャリアが継続できてないことの方が問題なんですよ。つまり、ママになって子育てをする修練期間があったときに、それがどうビジネス化されてないのかということの方が問題。つまり、そこで子供をあやすという能力が身についたのに、その身についたことに対して、社会が自分に対して還元してくれることがなかったりとか、それを社会に対してアピールする場がないという考え方の方が、僕は一番ポジティブな捉え方だと思っています。

僕、子供が生まれてから一番最初にやり出したのは、子供にロボットをくっつけて、どっちが顔認識うまいかなと探すことです。つまり、自分に子供が生まれたので、この題材

を使って、いかに俺は自分の専門性を使って、さらにお金を稼ぐだとか、社会に対して論文をどんだけ書くかとか、もしくは新しい教育メソッドを生み出すかということの方がポジティブな捉え方かなと僕は思ってます。

そういった中で、最後になります。僕、認知症の話が途中で出てきたんですけど、それって別に悪いことじゃないと思っているんです。なぜなら、人間が認知症の人に話しかけると、さっき言った近代的人間性がゆえに、「あなたは自律的に行動できてないから私に迷惑をかけているにもかかわらず、あなたは何も覚えていないと、これは非常に無責任である、だから怒りたくなる」という感情を僕らは殺さないで対峙できないわけじゃないですか。しかし、例えば、コンピューターとかテクノロジー自体は、そういった我々人間の持っている感情というのを持っていないので、例えば、うちのばあちゃん、認知症で死んだんですけど、認知症の方って、別に、手順どおりに教えてあげればできるんです、行動。ただ、短期記憶が少なかったりとか、物忘れが激しかったりとか、人の顔を認識できなかったりするんで、教えるプロセスが多様過ぎて、人間がマニュアルで対応できないだけなんです。だから、どうやってそこにテクノロジーを入れていくかということの方が、僕はキーワードになるんじゃないかなと思っています。そんな感じです。

【小池知事】 認知症をカバーできるロボットとか、AIとか、そういう形を考えられるわけですね。

【落合陽一様】 要は近代的ということは、人間が覚えられて人間が実行できるということに基づいて社会を組み立てるといことなんですけど、多分、僕の理解では。「コンピューテーショナルな」ということは、人間には理解不可能だけれども、コンピューターには理解可能な多様性のあるプロトコルを通じて、人間をどうやって律するかとか、逆に言うと、人間をどうやってサポートしていくかということなので、それに対する法整備みたいなものがかなり難しい。なぜなら人間には読み解くことができないからです。そこをどれだけ許容できるかというところが、僕は逆にキーだなと思っています。

【小池知事】 はい。忘れたいときもあるんですけどね。

さあ、みなみちゃん、いこうか。

【高橋みなみ様】 高橋です。皆さんの意見に比べたら、ちょっと薄くなるかもしれないんですけども、大丈夫でしょうか。

3人のお話を聞いていて思ったのは、すごく当たり前みたいなものが、全部、昔からでき上がりつつあるのかなと思っています。例えば、社会のリーダーは、女性より男性の方が

多いんだということだったり、介護は大変なんだということだったり、育児はママがやるの当たり前なんだという当たりの蓄積が、今こうして結果と出ていて、ツケが回ってきてしまっている状況なのかなというのはすごく思いましたね。

くわばたさんのお話を聞いてて、私、ちょうど先日、お友達のご夫婦のお家に行って、お子さんと遊んだんです。もう本当にかわいい、欲しいって、普通に言っていたんですけど、やはり育児をされている方のご意見聞くと、大変なんだと。でも、それって、やっぱりなかなか教わることがないんですよ。介護のことだったり、お母さんになったら、どれだけ大変かということだったりを、私たちは子供のときに教わらな過ぎてるなというのは、すごく思いました。

やっぱりママも休む時間が必要だし、パパだってこうやって育児と触れ合う時間が必要ということは、母の日・父の日とあったりとか、最近だとプレミアムフライデーというものはありますけど、それ以前に、ママ・パパの日みたいな、そういう日があったっていいんじゃないかって。もうちょっと生活と寄り添う休日を、もっとつくってもいいんじゃないかなというのは思いましたね。

プレミアムフライデーにしても、結局、お店を営業している方からしたら、お客さんが来る日になるわけだから、俺たちは休めないんだという意見があったりもする中で、一斉にみんなが、その日は絶対休める日だったりとか、そういうものがあってもいいんじゃないかなというのを、ちょっと思いました。

以上です。

【小池知事】 ありがとうございます。

じゃあ、パッケン、お願いします。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 はい。パッケンです。

僕もお三方のプレゼン、非常に楽しく、面白く見せていただきました。

僕も2人の子供がいて、よくみんなが遊びに来て、「かわいいね。かわいいね」って言うんだけど、「じゃあ、好きな方連れて帰っていいよ」って言うと、大体断るんですね。何だかんだ言って、みんな結構、育児の大変さは、ちょっと感づいていると思うんですよ。

でも、この未来ビジョンの会は、さすがにビジョンを示す、こうなってほしいという想像に基づいたものなんですけど、やはり具体的なステップも考えた方がいいと思いますね。

パパの日、ママの日、絶対休めるようにとか、持ってる子供の数に沿って休暇が変わる

とか、契約上で、もしくは日本は、結構、努力目標でも動く国でもありますから、経団連の力で大手企業からどんどん浸透させていくということも考えられると思うんですね。是非、その辺も東京都がリードできるところでもあるかなと思います。

あと、ちょっとアブディンさんと落合さんのご意見は、多少、女性議員の案に対しては否定的だったんですけど、僕はものすごく賛成するところです。

【落合陽一様】 俺、別に賛成ですよ。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 そうなんですか。

【落合陽一様】 すいません。つまり、5割、5割にするということの方が女性の多様性をそいでると思うんですよ。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 なるほど。5割、5割に限らないで。

【落合陽一様】 そうそう。だから7対3とかにしちゃって良くて、女性の方が多くていいんですよ、多分、場所によっては。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 男性の活躍の場を逆に減らすと。

【落合陽一様】 そうそう。減らしちゃってもいいわけです。つまり、それを一定割合にするということは、すごくフランス的なんですけど、我々の社会って、別に自由でも平等でも友愛でもなくて良くて、別に全ての議会が同じように5割、5割である必要ないと思います。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 なるほどね。

僕も行く行くはそうなってほしいなと思うんですけど、その未来への架け橋的なステップは何回か段階を踏まなきゃいけないかなと思うんです。そのためには、今も言いましたけど、例えば、努力目標で、政党内で決めていいかなと思うんですよ。何もフランスみたいに、法律とか憲法を変えなくても、各政党内で公認候補の数、まず次回は3割女性、その次は4割女性、その次は5割女性と目指して行って、その公認の数から、大体、有権者が選ぶから、行く行くは、もう自動的にそうになっていくかなと思いますよ。その先に8割、9割になっても構いませんけど。

【落合陽一様】 はい。そう思います。

例えば、とある軍隊では、全員女性にした方が強かったという例もありますし。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 そうなんですよ。イスラエルの話ですね。

【落合陽一様】 はい。

そういうようなことを考えたときに、だから、その比率というのは、多分、適材適所、

もしくは土地の文化によって決まってくるので、そこを自由にするというのは、我々は、だから多分、条例ベースとか、地方分権ベースでしか語れないので、ここで語る意味が非常にあると思います。それは国会で議論してもしょうがないんですよ。東京都は何割にするかという問題だと思うんです。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 とりあえず。

【モハメド・オマル・アブディン様】 いいですか。私は否定的ではなくて、これだけではちょっと。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 僕、すごい勘違いしているようです。すいません。

【モハメド・オマル・アブディン様】 いや、そうじゃなくて、要は、例えば、全然違う例を挙げましょう。

最近、自民党は減反制度、要は使わない田んぼに補助金出さないよということで廃止するというので、それはもともと農協とかは自民党の支持ベースだったということで、支持基盤だったんですね。だけど、農民がどんどん減っていくと、別に農民のために、何かご機嫌伺いしなくてもいいということで、減反制度廃止だったり、あるいはTPPだって、農協があんなに騒いでいたのにながしろにしよう。要は、もう支持基盤としては有効じゃなくなったということで、小手先で女性活躍とか言ってますけれども、それはやっぱり女性が新たな支持基盤として政治家も狙っているわけですね。だから狙われる身として、狙われてやりますよ、でも、私たちの言い分を通さないと1票入れてやらないよという賢さは、したたかさは重要なと私は思っているの、草の根レベルでの女性の政治活動は、日本ではやっぱり政治活動って非常に煙たがられますよね。やっぱり政治の話はなかなかしないわけですね、一般の人たちはね。だから、そこはやっぱり変わっていかないと、エリートレベルでの女性の国会への進出だけでは、事はそんなに解決していかないんじゃないかなとは私は。はい。以上です。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 それ、僕ももちろんそう思うところがあります。ただ、卵と鶏みたいな問題もありまして、今の女性は、そのお手本になるロールモデル的な女性、目立つ女性の割合が少な過ぎると思いますね。大手企業の社長さんも少ないし、議員も少ないし、大臣も少ないし。

3年前に自分の娘が卒園式で、何になりたいのかって、卒園証明書もらった後、みんな、お客さんに向けて発表するんですよ。サッカー選手になりたいとか、体操選手になり

たいとか。1人も政治家になりたいと言わなかったですね、エレベーターガールになりたいと言ったのは2人なんですけど。今だったら、もしかしたら都知事になりたいという園児がいらっしゃるかもしれないです。こういう目立った存在がものすごく大事であって、せっかく都に新風が吹き出しましたので、どうですか、未来に向けて、女性議員の数を上げていこうと。

【小池知事】 国会の方でクォータ制を導入するかどうかというのも、随分、議論をしてきました。まだ続いていると思います。

あんまりそれをやると、憲法違反だとか、色々な議論が出てきて、だったら政党の公約として入れればいいじゃないかということだと思っただけですね。なので、やっぱり人口が半分半分男女であるならば、フィフティー・フィフティーを目指すのが普通というか。

【伊勢谷友介様】 民主主義ですからね。

【小池知事】 うん。いいんじゃないかと思うし、さっきの松澤さんの、ここにはつまらないおじさん、1人もいませんけれども。

【松澤香様】 はい。

【小池知事】 やっぱり都政も変えていくといったときには、女性の意思決定の場に、もっと多くの女性がいないと、かなり日本はいびつになって、というか、既にいびつなんですから、だから、そのあたりはやはり女性を多く意思決定の場に置くというのが何よりも必要なことだし、将来、50年後、100年後、日本が持続可能であるためには、それが必要だなというふうに思ってますね。パイオニアに選ばれたんで、頑張りますけどね。

さて、高校生内閣、いこうか。

【浜田愛音様】 ありがとうございます。

お三方のお話、とても興味深く勉強になりました。ありがとうございました。

そうですね。私は教育や子供の貧困など、多くのテーマに興味があるんですけど、今日は仕事だったりとかライフのことだったので、私はそれについて、今、少しお話しさせていただきたいと思います。

私は法律に関わるお仕事に携わりながら、政治にも触れていきたいなと思っております。その中で周りの高校生も、たくさん政治に関わりたかったりとか、政治のことを知りたいという高校生はたくさんいるんですけど、やはり周りの目というのがあります、政治って難しいことだ、かたいことだっていうふうに見られがちなんです。でも、そういう意識をなくしたいということもあるんですけど、やはりもっと女性議員を増やすためにも、

周りが政治をもっと身近なものにしていく必要があると思うんですね。

その中で、私がすごい思ったのが、くわばたさんの話で、高校生に、もっと、子育てって難しいことなんだよとか、子育てって、でも楽しいし、こういうことが待ってるんだよということを、しっかり高校生だったりとか中学生だったりとかに伝えることって大切だと思うんですよ。なので、今後、高校生内閣と、くわばたさんがコラボして、何かお話を聞けたらなと、すごく思いました。

【くわばたりえ様】 めっちゃやりたいです。

【浜田愛音様】 よろしく願いいたします。

私は実はフランス人の父を持っていて、母親は日本人で、いわゆるハーフなんですけど、その中で、私もフランスのインターナショナルスクールに通っておりまして、仕事をしながら子育てをしているお母さん、たくさんいます。

私が何でそういう働けるお母さんがいるのかなと感じて、その理由を探してみたんですけど、フランスでは就業時間や休暇が徹底して守られています。17時に仕事を終わると言ったら、もうその時間に終われるんですよ。なので、家に帰って子育てもできます。あと、（育児）休暇をとった後、復帰するときも法律があるんですよ。絶対、その仕事に復帰できるという法律があるので、絶対に地位が守られているんです。なので、日本もそういういいところだったりとか、世界のいいところを見て、東京が先頭に立って新しい改革を進めていくべきだと思っております。

高校生も、やはり政治に関わりたい、社会に貢献したいという思いがあるので、私たち高校生内閣も、今後、政治や社会のことを、より皆様に、高校生に伝えていけたらなと思います。

【小池知事】 今、愛音ちゃんは総理大臣なの？

【浜田愛音様】 そうですね。前回、総理大臣だった飯野さんが、今、活動を休止しているため。

【高橋みなみ様】 そうなんですね。活動休止があるんですね。

【小池知事】 いつ政権交代になったの。

【浜田愛音様】 私が今は総理大臣を務めさせていただいております。

【小池知事】 今日は官房長官いるの？

【浜田愛音様】 官房長官ではなく、副官房長官が来ております。

ありがとうございます。

【小池知事】 はい。ありがとうございます。

蜷川さん、いこうか。

【蜷川実花様】 1歳7カ月の息子がいて、昨日は夜泣きで寝れなくて、3時間ぐらしか寝てないんですけれども、今日、9歳の息子が遠足だったので、朝5時に起きてお弁当つくって、打ち合わせを四、五件して、撮影をして、ちょっと遅れて、今日来ました。

やっぱりお母さんの大変さというのを本当に身にしみるほど分かるというか、あまりに最近大変で、色々なことが回らなくなって、本当につい2日ぐらい前に、夫に専業主夫になってくれないかという話を持ち出したぐらい、ちょっと今、話し合っている、どうしようかという感じなんですけれども、それくらい、お母さんであるって、やっぱり壮絶に大変なことなんですよね。でも、それと同時に、ものすごく震えるほど幸せなこともたくさんあるので、その両方をきっちりと伝えていくことが大切なのかなと、まず思っています。

やっぱり、まず教育かなと思っていて、私は2人とも息子なんですけれども、絶対に女の子が働くことを助けろという教育にしている、私はこういうふうにしてほしいって、こういうことが嫌だったなと思うことを徹底して息子に教えているので、実は9歳の息子が一番好きで会いたかったのは小池百合子知事なんですよ。

【小池知事】 戦国武将が好きなのよね。

【蜷川実花様】 そうなんです。戦国武将が好きで、百合子さんが戦国武将のように格好良くて、どうしても会いたって言って、実は『AERA』の撮影で1度お会いしたときに、こっそり連れてきて、お会いして、写真撮ってもらったら、その後、真っ赤な顔して、「すごいきれいだった」って言って、いい仕上がりに9歳の方は育てているなと思っているんですけど。

やっぱりちっちゃいときから、男の子にも特に教育した方がいいと思うんですけれども、女の子にも、諦めなくていいんだよということと、周りの空気を読まなくて良いということとをしっかりと教えておいた方がいいと思っています、それは私も若干、大人になってからのカチコチな頭を崩すのは、やっぱりちょっと難しいんですよね。子供たちの世代に、いかに女の人も働きたい人は働いた方がいいし、主婦をするということがどれだけ大変かって、また、逆に男性も主夫をしたって全然いいんだよという男女の垣根みたいなことを、それこそ5対5じゃなくていいんですけど、自分の自由で決めていいんだよということと、やっぱり女性の人権みたいなことはしっかり教えていった方がいいなと思っています。それには、まずお母さんたちも、頭をもうちょっと楽に変えてあげるシステムが必要かなと思っ

ていて、みんな、さっきの話じゃないですけど、罪悪感を持っていたりとか、私が実は母親向けの雑誌を、かなりとがった雑誌をやっていたことがあるんですけども、そこで取材したら、みんな復帰することに罪悪感を持つんですね。こんなかわいい子供を置いて、保育園に出てまで働く仕事なのかということで、ほとんどの人が罪悪感を持ちながら復帰していたんです。それって、やっぱりすごくおかしなことで、そんなことないよという背中を押してあげると、随分自由に羽ばたいていたりとかしてくださったことがあるんですけど、お母さんたちがものすごく真面目で、自分たちのことを自分でかせをつけてしまっているところもやっぱりあるんですよ。それは周りの環境もあるんだけど、まずはこう言っているんだって、もっと言っているんだ、働いてなくても子供預けていいんだ。だって美容室だって行きたいしとか、そういうようなことしていいよねということを経験し合える場がまずあって、そうしたら子供たちに、女の子でも、男の子でも、君たちが大きくなったときはそうなりたいよねということが全く普通のことになっていくの、やっぱり早道かなと思うんです。

ちょっと大人、難しいんですよ。もちろん、今の世の中も変えていけるほどの努力はした方がいいんですけども、子供を、もし仮にそういうふうな認識で育てていたりとか教育していくということは、実はすごく一番の近道かな。何か今日はすごく自分の話を聞いているかのようで、分かるわ、分かるわと思いつつ、後で一杯話したいことがあります。なので、そんな感じです。

【小池知事】 ありがとうございます。

もう時間、あと5分ぐらいしかないだろうけど、最後、お二人、是非これ言っておこうという方。じゃあ、田根さん、それからあと奥多摩、檜原村？

【青木亮輔様】 檜原村です。はい。青木です。

【田根剛様】 非常に専門性も高くて、さらにすごく分かりやすくプレゼンテーションしてくださったので、実感もありながらも、そうだよなと思いつつ、どう言ったらいいのかなと考えながら聞いてました。

自分も日本の東京生まれなんですけれども、大学の途中からスウェーデンとデンマークと北欧に、学生と、働いたりとかして長くいたので、社会の仕組みとして、先ほどの介護の問題とか、教育の問題とか、仕事のこととか、育児のこととかと、かなりしっかりとした社会なんですよ。それは自分は最初に、やっぱり早く物事をどんどん進めて成長していくという、日本で育った経験から真逆の、ゆっくりと、じっくりと暮らしていくという北

欧の文化にすごく衝撃を受けて、同時に、じゃあ、日本が今、なかなか違う時代に向かっていくときに、これからどこに向かうのかというのをすごく考えていた20代の時期があったんですけども、その中で、今のお話も伺いながら、生活と仕事というのが、生活というのは、もしかしたら生きることについてしっかりと考えることを見直す時期なのかなと。仕事というのは、生きるというベースがあって、何かをするという、もう一つのベーシックな人間の欲求みたいなものがあるって、何かをするということと生きるということの2つのベーシックなものをもう一度考え直すことが大事なのかなと。そのときに、こういう議論があったり物事を決めていくときのことというのは、どうしても色々な事例があったり、色々な数字が出てきたり、色々な問題点ばかりが始まっていくんですけども、その問題から考えるのではなくて、何が一番、この時代の現代社会におけるベースが必要なのかというのと、一方で、それがどこなのかという場所がいつも忘れられがちなので、東京都というのでも、やっぱり都内もあれば市町村もあって、その場所ごとに多分色々な問題が違うので、場所ごとのベーシックは何かというのから考えると、新しい時代のベーシックを地域ごとに考える方が、何か未来が見えそうだなというふうに考えて聞いていました。

【小池知事】 はい。ありがとうございます。

田根さんは、今、ベースド・イン・パリですね。ということで、今日はパリからお越しいただきました。旅費は出ないので、ごめんね。

それから、じゃあ、今日、最後のメッセージは青木さん。自己紹介も兼ねて、お願いします。

【青木亮輔様】 今、ご案内ありました檜原村。東京の檜原村から参りました、東京チェンソーズという林業会社をやっている青木と申します。

今、お話を聞いていて、同じ東京とは思えないというかですね。というのは、どういうことかというところ、うちの会社は、西田君ももしかしたらそうかもしれないんですけど、うちの会社って林業をやっていて、朝は早いんですけど、7時半には会社を集まって、大体5時半にはみんな帰っていくという生活です。それは、時期によって、春には木を植えて、夏にはその草を刈って、秋から冬は伐採をして、山から木をおろすという仕事なんですけど、そういう仕事を通じて、うちの会社って、比較的若い人が多くて、平均年齢、林業界に珍しく、30歳ちょっとなんです。そうすると、ちょうど子育て中の家族というのが、すごく多いんですね。その子たちは、もう5時半には家に着いて、会社から家まで10分、20分なので、5時台には子供たちの顔をおそらく見ているんだと思うんですね。

そういう生活が同じ東京の中であって、そうすることで、先ほどの、くわばたさんのお話にもあった育児というのを、お父さんが普通に多分されているのかなど。遊びに行く場所もないんですね。なんで、もう家にいますし、そういった意味では、すごく、そういう多摩のエリアという、檜原村もそうですし、奥多摩もそうなんですけど、そういう多摩のエリアの可能性というのを、逆に今、すごく感じていたなと思いました。

メイミさんの介護のお話も、私なんか、そういう介護って、自分が介護をされるという意識、全然なかったんですけど、確かにそうやって考えると、うちは子供がいないので、もしかしたら将来、うちのかみさんと2人でというふうになったときに、でも、近くに意外と多摩のエリアって老人ホーム多いんですよ。それがいいのか悪いのか、ちょっと分からないんですけど、老人ホームが多いので、老人ホームも近いと。先ほどの通勤に時間かけてるというのもそうですし、多摩のエリアというのは、生活をして職場も近い。最悪というか、私が介護される身になったとしても、それも近くにある。環境はあまり変わらないという意味では、本当に何かすごく、同じ東京なのに多摩のエリアのすごい可能性を感じたなというふうに思います。ありがとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。

今、西田さんのお話も出ましたが、西田さんは三宅島で漁業をやってらっしゃるということで、また次回、そのライフスタイルなどについてもお話を聞ければと思います。

さて、今日は生活面で、特に女性という観点からお話をたくさんいただいたと思います。東京都では、いわゆるワーク・ライフ・バランスという言葉、働き方ですね。これをもう少し見直そうとか、大胆に見直そうとか、そういうキャンペーンを自ら始めていますが、その一番のポイントは、ワーク・ライフじゃなくて、ライフ・ワークに変えたということなんです。ライフが先ですよ。ということで、ライフがあって、ワークがあって、そしてバランスとっていきましょうねという、そういう形で働き方の前に人生をちょっと見直そうよということで。そして、そういうことを都庁で始めることによって、逆に都民を第一に考えた都政ができるんじゃないかなというふうに考えています。

とはいえ、なかなかうまくいかないところがあって、残業もまだたくさんあるんですが、でも、都庁から変えていこうと考えています。

今日はそうやって3人のプレゼンターの方、どうもありがとうございました。時間が短かったかもしれませんが、いいプレゼンテーションによって、色々な刺激を受けて、今日の会話が進んだことと思います。ありがとうございます。

そしてまた、このビジョン懇談会ですけれども、自由に話していただいて、自由に東京を語っていただいて、そして東京のこれからのビジョンをしっかりと皆さんとともに描いていきたいと考えております。

今日、お話しただけなかった皆さんには、次回、今度いつだっけ。

【潮田次長】 5月下旬の予定です。

【小池知事】 5月の下旬。はい。しっかり、そのときには、またプレゼン、僕、話したい、私、話したいという方、手を挙げていただきたいと思います。オリンピック・パラリンピックのスポーツの皆さんもいらっしゃいますし、そういった話でも構いません。というか、是非、これを提案したいという方、みなみさんも、そろそろね。よろしく願いします。

【高橋みなみ様】 はい。お願いします。

【小池知事】 ありがとうございます。そして、今日は自由な話ですけれども、しっかり、この後、ビジョンにまとめていきたいと考えております。皆さん、ご出席ありがとうございました。

【潮田次長】 どうも、皆様、ありがとうございました。以上をもちまして、第2回東京未来ビジョン懇談会を終了いたします。先ほどお話ございましたが、次回、5月下旬に開催をいたします。よろしくお願いいたします。

【小池知事】 どうも、皆さん、ありがとうございました。

— 了 —